

システムの箱を持ったゲーム開発部が
先生を探しに外の世界へ立ち向かう話

もくじ

第六話 適応

58

第一話 アリスとシツテムの箱

4

第七話 潜入作戦壱

67

第二話 獅子の子落とし

15

第八話 潜入作戦弐

77

第三話 洗礼と蹂躪

26

第九話 ずれた歯車

95

第四話 ヘイロー

40

第十話 AL

101

第五話 再起動

49

あとがき

106

生きることは、すなわち闘争である。

それは明日の為、仲間の為、前へ進む為に背中を押してくれた、先生からの大切な教え。

ただその果てに、避けようのない犠牲が必要なら――

第一話

アリスとシッテムの箱

「先生、いらつしやいますか？」

電氣の消えたシャーレ執務室に、アリスが顔を覗かせる。いつもなら先生や当番の生徒が常駐しているはずだが、昨日今日は昼間にも関わらず誰もいない。

平時は採光に優れる執務室内も、今は天氣が芳しくないことも相まって薄暗く感じられた。

「やっぱり、今日もお留守なのでしょうか？」

先生の不在はあらかじめ公表されていた。

連邦生徒会いわく、数日の間はシャーレを離れ、連絡も断つとのこと。

このような休暇申請は今に始まったことではない。

先生は誰にも行き先を告げず、忽然と姿を消すことがある。

初めこそ不安に駆られる生徒も多かったが、先

生は数日も跨げば再び現れ、周囲の心配などどこ吹く風と日常を再開させるのが常だった。

今では生徒のほとんどが、それらを多忙な先生の慰安であると納得していたが——今回のアリスは事情が異なった。

「先生がいないと、アリスは寂しいです……」

本来、この二日間はアリスの当番になる予定だった。それが突如として取り消しにされたことが、彼女の侘しさをより一層に滲ませていた。

故にこうして、誰もいないシャーレヘゲームを携えてやって来たのだ。

アリスは少しでも先生の名残りを肌に得るべく、普段の彼が業務に励むデスクへ足を運ぶ。

——そこでアリスは、見覚えのある一つの機器を見付けた。

「これは……先生がいつも装備しているタブレットですね！ パンパカパーン！ アリスはたいせつなものを手に入れた！」

アリスは誰に見せるでもなく、満面の笑みを浮かべてその重要アイテムを高く掲げる。

ついでに画面をタップし、スライドもしてみるが——やはり反応は無い。

「……先生、どうしてずっとこれを持っているのでしょうか？」

当然、答えは返って来ない。そしてアリスは、タブレットを元の場所に戻そうとして——それに目を留めた。

「……紙？」

どうやらタブレットの下に隠されていたらしく、何かが書き記されている。

それを——アリスは読み上げた。

「……我々は望む、七つの嘆きを。」

「……我々は覚えている、ジェリコの手紙を。」





The Quest of outside Kivotos

**システムの本を持ったゲーム開発部が
先生を探しに外の世界へ立ち向かう話**

.....

「接続パスワード承認。新規の接続者情報を確認しました。」

「Guest 権限を譲渡。」

「シッテムの箱へようこそ。」

「これより、生体認証及び認証書生成の可否をテストします。」

「メインオペレートシステム A.R.O.N.A に変換。」

シッテムの箱……？

思考が遮断され、意識が吸い取られる――



見たことも無い教室で、一人の女の子が机に伏して居眠りをしている。傍らにはそれを見守る別の少女。その二人はモモイとミドリほどではない

にしろ、姿形が似通っていた。

頭上にはヘイローが浮かんでおり、そこから彼女らが生徒であると推察できる。

「くう……くう……ZZZZ」

「……あれ？ ここはどこですか？ アリス、ついさっきまでシャーレに……あれれ？」

突然の出来事に、アリスが心細く慌てていると

――黒いセーラー服の大人しげな生徒がその様子に気付いた。

「……!! 先輩、アロナ先輩」

白い髪を膝下まで伸ばしたその少女は、彼女がアロナ先輩と呼ぶ女の子の肩を揺らす。

「ふへっ……もうこんなにたべちゃいましたあ」

「起きて下さい先輩」

「……あの……ケイ、ではありませんよね？」

二人の存在を認めていたアリスが、恐る恐るに声をかける。

――すると、レースのような純白の艶髪を摩^{なび}か

せて、少女は振り向いた。

「肯定。私はケイさんではありません。プラナとお呼び下さい。……確認。あなた様のお名前は、天童アリス様でお間違いないませんか？」

「……！ アリスを知っているのですか？」

「肯定。あなた様の勇姿を、先生のすぐ近くから見ておりました」

言うまでも無く、アリスの記憶領域内にこの生徒——プラナの情報は保存されていない。

「その……差し支え無ければ、アリス様も先輩を起こすのを手伝っていただけませんか？」

プラナはショートボブの可愛らしいアロナ先輩を撫でる。垂れ落ちる青みがかった銀髪の奥には、桃色のインナーカラーを覗かせていた。

「……なるほど、これはきつとチュートリアルクエストですね！ それならアリスにお任せ下さい！」

アリスは水張りの床に波紋を延ばして、眠れる少女に近付く。そして色々な角度から繁々と覗き

込んだ後、彼女の頬を突いてみた。

「つん」

「うにや……もつたいないですよ……しつかり味わわないと……」

「つんつん」

「あうん、でもお……」

「つんつんつん」

「……ううゝんっ」

そして、業を煮やしたアリスは——腕を振り上げる！

「光よ!!」

その掌は間違い無く頭を捉え、痛快な打音が辺りを突き抜けた！

「いったああ!?! な、何ですかあ!?!」

アロナが目を丸くして飛び起き、頭を抑えて慌ただしく左右を確認する！

「……ありや？」

が、すぐ正面にアリスがいることを認めると、

その視線は釘付けになった。

「ありや、ありやりや？ え、あれ、あれれ？」

やりました、クエスト達成です！とアリスが喜ぶ一方、二人は真剣に話をしている。

「やっと起きましたか、先輩」

「プラナちゃん！ もしやこの生徒さんは……!?」

「はい。この空間に入ってきたことが何よりの証拠かと」

アロナは脇目も振らず、未だ状況の掴めないアリスに質問を投げる。

「あ、あの！ 念の為に名前を伺っても!？」

「ふえ？……アリスは、アリスです。……天童アリス」

何の気無しに、聞かれたまを答えていた。

「……接続者情報、更新完了。天童アリス様の権限をGuestからAdminに格上げしました」

「ゲスト？ アドミン？……何だかコンピュータみたいですね……不思議です」

「うわ、わああ？」

「どうどう、先輩落ち着いて」

二人は何故だかそわそわしていた。

——そんな彼女らに対して、アリスは至極当たり前の疑問をぶつける。

「あの……お二人は、どちら様なのでしょう？」

それを聞いた二人の生徒は、はっとしてアリスに顔を向け、すぐに視線だけを戻し示し合わせた。

——そしてアロナは立ち上がり、二人は改めてアリスに向き直った。

「「システムの箱へようこそ、アリス様」」

「まず自己紹介からさせて下さい！ 私はアロナ！ このシステムの箱に常駐しているシステム管理者であり、メインOS。そしてこれからアリス様をアシストする補佐役です！」

「システムの箱……って、何ですか？」

「さっきアリス様が起動した、あのタブレットのことですよ」

それを聞いたアリスは、例のタブレットとアロナ、そしてこの空間に何らかの関係性があることを漠然と把握した。

「改めまして、私はプラナ。アロナ先輩の後輩です。右に同じく、これからアリス様を補佐いたします」

プラナは礼儀正しくお辞儀をした。

「なるほど……理解しました！ これは仲間加入イベントですね！ パンパカパーン！ アロナとプラナがパーティに合流しましたーっ！」

「ば、パーティですか……？」

「ふふ、そう言えばそんな子でしたね」

アリスの天真爛漫ぶりに、二人は微笑む。

「さて、次のお手続きです！」

アロナは、両手を合わせて話を切り出す。

「これから形式的ではありますが、生体認証を行います！ こちらの方に来て下さい」

「……？ こう、ですか？」

言われるまま、アリスは二人の前に歩み寄る。

「もう少しです」

アリスは更に歩み寄り、二人のすぐ目の前で足を止める。すると、アロナが人差し指をかざした。

「さあ、この私の指に、アリス様のを当てて下さい！」

アリスは自身とアロナのそれを交互に見比べる。

そして、ぎこちなくも彼女の指示に従うと――接触した二人の指先から、三角の光が飛び散った。

「わ……これは？」

「ふふ、まるで指切りで約束するみたいでしょう？」

「……！ アリス知ってます！ これは宇宙人との交流ですね！ 古い映画で見ました！」

「ん……あれ？ 前に先生も同じようなことを言っていたような……」

「困惑……私達は宇宙人ではありません」

アロナはあざとく咳払いして閑話休題する。

「こはんっ！ 実はこれで、生体情報の指紋を確認します。画面に残った指紋を目視で確認するんですよ！」

そう言つて胸を叩くアロナに、アリスは瞳を輝かせた。

「アリスにそのような機能は搭載されていません！アロナは凄いです！」

「ふっふっふ、それほどでもありますよー！……さて、どれどれ」

アロナはその場に浮かんだ指紋をまじまじと観察し始める。

うーん、やつぱりよく見えない……このやり方、変えた方が良いのかな？ ……まあ前回も大丈夫だったし、今回もこれで良いですかね？

「……………」

アリスは再び、自身の指先を見た。

「——はい！ 確認終わりました！」

「……。それ、本当にできていますか？」

どことなく難色を示すアロナの表情を、プラナは目ざとく見破る。

「も、勿論です！ このスーパーアロナちゃんに

不可能はありません！」

「じー」

「全然信じてないって顔ですね……」

二人の視線が鏢迫り合う。少しの間、二人の間で火花が往復していた——が、先に根負けしたアロナが目尻に涙を浮かべ始めた。

「うう……！ だったらお二人だけでお話したら良いじゃないですかあ！」

「……冗談ですよ、先輩」

「くすん……」

「アロナ、大丈夫ですか？ よしよし、アリスが沢山撫でてあげます！」

「よしよし」

二人はアロナを目一杯慰めた。



アロナとプラナから事情を聞かれたアリスは、箱を起動するまでの経緯を話した。

「……なるほど、アリス様はやはり先生を探していたのですね」

「……………」

アリスの表情は僅かに渋い。

「プラナ、あの」

「……？ はい、何でしょう」

「その……アリスのことは、アリスって呼んで欲しいです」

「え？……ですが」「あ、そうですね！ やっぱり堅苦しいですよ！ 私もそんな風に思っていました！」「先輩……」

プラナのそれとない葛藤も、アロナは豪快に吹き飛ばす。

「じゃあ、これからはアリスちゃんが良いですか？」

「はい！ ありがとうございます、アロナ！」

「……。私としては、シッテムの箱のOSとしてあまり所有者を軽く見たくはありません。私はアリスさんとお呼びしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「それでも嬉しいですよ！ プラナ、ありがとうございます！」

アリスはお日様のような笑顔を浮かべた。

「……そろそろ、話を戻しましょう」

そこで、プラナの態度は幾分か真面目になる。表情を和らげていたアロナも、彼女が言わんとすることを察して少し姿勢を正した。

「アリスさんが知ってたがっていた、先生の所在についてですが——先生は今、キヴォトスにいません」

「……………へ？」

アリスは呆けた声を上げ、冷や汗を走らせる。

「ど、どういうことですか？ アリスには分かりません！」

「……先生は、キヴォトスの外へお帰りになられています」

「……キヴォトスの、外……」

地理に疎いアリスでも、話には聞いたことがある。先生の出身地で、ここではないどこか。アリスは

おろか、先生以外の誰も具体説明ができない未知の世界。その存在だけが広く知られている謎の概念。「私とプラナちゃんは、先生からの言伝を預かっています」

「言伝？ ……アリスにですか？」

「正確には、シッテムの箱を最初に起動した人に向けたメッセージです」

「はい。その内容は——」

アリスは、固唾を吞んで待ち構える。

——そして。

「外の世界で、先生を探して下さい」

アロナはそう口にした。

第二話 獅子の子落とし

アリスはシッテムの箱を両手に持ち、ミレニアムの学棟、その廊下を走っていた。

「アリスちゃん！ 走ると危ないですよ！」

「あつ、ごめんなさい！」

アリスは一度素直に従う。——しかし、はやる気持ちを抑えきれず、また徐々に駆け足へと変わっていった。

「よほど皆さんに見せたいようです」

「ふふ、可愛らしいですね♪」

そしてアリスは、部室の扉を勢い良く弾く！

「アリス、ただ今帰還しましたっつ！」



アリスはゲーム開発部のメンバーに、これまでの経緯を説明した。

「へえ……じゃあ先生は、ずっとこの子達と一緒ににいたんだね」

モモイは物珍しそうにアロナを突つく。

「わっぷ、ほっぺたつんつんしないで下さいっ！
んにや、鼻先もダメです！」

「ちよつとお姉ちゃん、アロナちゃん困ってるよ！」
横で様子を見ていたミドリがそれを諫める。

「でも気にならない？ 画面の中で生活してる女の子なんて」

「つんつん♪」

「ひゃあ！ アリスちゃんそこはダメです！」

「……た、確かに気になるけど……もつと、大事なお話があると思う……」

「……そうですね。今は先生が気がかりです」

ユズが辿々しくも話し合いを促し、ケイもそれに便乗する。

「——では、本題に入りましょう」

そして、プラナが話を切り出した。

「先生の言伝は、先もアリスさんがお話した通り、外の世界へ探しに来て欲しい、というものです。皆様にはその先生の嘆願を聞いていただきたいのです」

そこにケイが、真つ先に異議を唱える。

「その嘆願とやら、私はどうにも怪しく聞こえます」

「え、えと……ケイちゃん、どうして？」

ケイはその理由を述べ始めた。

「まず、先生の言動に明らかな矛盾があります。

自分の意思で行った先生を、何故わざわざ探しに行かなければならないのですか？」

「……確かに」

さりげなく会話に混じったミドリが同調を示す。

「先生はいつも数日で帰って来るわけだし、単に大人しく待ってれば良いんじゃないかな？」

「あと、わたしたちに……その、シツテムの箱？を託したことも、気になるかも。だって、さつき聞いた限りだと……プラナちゃんたちは、先生を

危険から守る、命綱みたいなものだし……」

ケイ、ミドリ、そしてユズの疑問は、それぞれが至極真つ当なものだった。——それに対し、プラナは目を逸らして渋い顔で返答する。

「すみません。それらについては詳細を知らないのです」「知らない？」

ケイは食い気味に訝しむ。

「……訂正。語弊がありました。正確には、何を聞いても先生からの回答を得られなかったのです。——ただ一つ。シツテムの箱を起動した誰かに、後のことを託して欲しいとだけ」

あまりに要領を得ない説明。三人は言葉を失う。

「深刻な面持ちでした。先生が何らかの事情を抱えていることは、間違いないと思われます」

ユズとミドリは、不安げに顔を見合わせた。

「では仮に、その話を信じたとしましょう。その場合、私達は外の世界へ飛び出すことになるのでしょうか——どうやってそれを実現させるんですか？」

ケイは肩をすくめる。

「これは私の認識ですが、外へ踏み出す手段はどうか、それが本当に実在するのかすら半信半疑の状態です。私もキヴォトスの古代史やロストテクノロジーについては詳しい自負があります。何せその時代を生きていたので」

「……………」

「しかしキヴォトス外の知識については私にも持ち合わせがありません。記憶領域に一切の情報が無いんです」

ケイの話は続く。

「それに、世界地図を見ればすぐに分かることですが、キヴォトスの東端と西端は繋がっており、同様に北端と南端も繋がっています。キヴォトスの外に該当する座標は、名もなき神々の文明をもつてしても観測に能わっていません。これらは古来より変ずることの無い常識であり、覆しようの無い事実です」

プラナは口を衝いて溢れかけた指摘を呑み込んだ。

「……………。外に出る手段につきましては、問題ありません」

「…………？ 何故そう言い切れるんですか？」

ケイのその問いに、一呼吸を置いて——プラナは断答した。

「アロナ先輩が、方法を知っているからです」

それを聞いたケイ達は、驚きに目を見開く。——そして。

「つんつんつん♪」

「つんつくつん♪」

「あんつ、やんつ！ うあ、そこは……！ こ、これ以上は止められすよお！」

その傍らで、会話に参加しなかった三人がふざけ倒していた。

「……先輩、今真面目な話をしているので自重して下さい」

「そんなー！ 私悪くないのにー！」

「お姉ちゃん……」

「アリスまで何してるんですか……」

「…………えつと…………と、とりあえず、これからどうしようか…………？」

ケイ、ユズ、ミドリ、そしてプラナは、改めて今後について話を始めた。



アロナに案内されるまま、ゲーム開発部はD・U・郊外のとある駅へと向かっていた。

「さっきのユウカ、怖かったね……」

ミドリの吐露には疲労感が漂う。この場に至る前、開発部はユウカに会いに行っていた。

先生とシツテムの箱に関しては徹底して話題に出さないよう努めていた。

「ね！ こつちは長期欠席を申請しただけなのに、あんなに怖い顔することないじゃん！」

「私も初めて凄まじりましたが、リオの気持ちさが少し分かった気がします……」

「うわーん……」

五人はすっかりやつれていた。だがその一方、ユウカの気持ちにも理解があった。鋼鉄大陸の一件で迷惑をかけた手前、ユウカの心配は素直に温かい。「ひ、ヒマリ先輩が助け船を出してくれなかったら、危なかったかも……」

「うん。……でもヒマリ先輩、ちょっと変だったよね」
ユズとモモイは、そのときの状況を思い返していた。



「ヒマリ先輩、先ほどはありがとうございました。
お陰で助かりました」

セミナーを後にしたミドリとゲーム開発部が、
ヒマリにお辞儀をする。

「構いませんよ。私もあなた方には恩義がありますので」

「そ、そんな……恐れ多いです……」

目上の、しかもまことしやかに全知と呼ばれる

天才におだてられ、ユズは逆に萎縮してしまった。
「皆さん、そろそろ行きましょう！ 先生が待っています！」

「同意。急ぐに越したことはありません」
アロナとプラナが促す。

「……では、私達はこれで。アリス、行きますよ」
「はい！ ヒマリ先輩、また会いましょう！」
開発部は踵を返した——が。

「お待ち下さい」
それをヒマリが呼び止める。

「まだ何か？」
「……本当にミレニウムを離れるのですね？」

その表情は、心配に染まっていた。

「正直私も、気持ちはユウカさんと同じです。かわいい後輩達を旅立たせるには、あまりに変数が多過ぎます。……リオも、恐らく同じことを思うはずです」

特異現象捜査部は、とある調査の為にヒマリとケイを残して現地へ向かっていた。

ケイにはその詳細が伏せられている。学園生活に水を差すまいとする、部員達からの便宜だった。

「それは……気持ちだけ受け取っておきます。私達にとって、この休暇はそれほど大切なんです」

「……意志は固いのですね。……なら、これを」

そう言っただけで、ケイが差し出したものは——前時代を思わせる、無骨な無線機だった。

「スマホのような便利機能はことごとくオミットされています。しかし無線通信に限れば、キヴォトスの何処においても問題無く繋がるはずですよ。……気休めになるかも知れませんが、何かあったら私に繋いでみて下さい。私からも定期的に連絡を試みます」

ヒマリは一人ひとりに目配せをする。その言動は徹底して仄めかされているものの——何かしらを見透かされていることが伝わった。

「……ありがとう、ございます」

アリスは一転、緊張の面持ちで無線機を受け取る。

「では、健闘を祈ります」

ヒマリは車輪を回し、静かにその場を去っていった。

「……い、行こう、みんな」

いつになく真面目なモモイの語気に、全員が気を引き締めた。



「あ、見えてきました！ あそこですよ！」

アロナが画面の中から指を差す。見るとビル街の中に、地下鉄駅の入り口がこじんまりと佇んでいた。その看板には、キヴォトス前。特徴的な駅名のはずだが、誰の記憶にも残っていない。

「こんなところに外行きの列車が？」

「はい、そうです！」

「……ねえねえ、ここにそんなのがあるなんて聞いたことある？」

「わ、わたしは……無いかな……」

「うん、私も」

しかしアロナの自信は揺らいでいない。モモイ達の頭の疑問符は増えていくばかりだ。

「……！ ちょっと待って下さい」

唐突にケイが足を止める。他の四人もそれに続き、彼女へ振り返った。

「何か変です」

低い声で、彼女は周りを警戒する。

「……。私達以外に誰もいません」

「え？」

その発言に、嘘偽りは一切無かった。

——誰も、いない。ビル街を闊歩する、スーツ姿の住民も。駆動音を唸らせる、車の影も。餌を求めて群がる鳩さえも。生き物の気配だけが、その場から綺麗にくり抜かれていた。

「つ……」

ミドリは思わず、モモイの手を握る。

「な……何、これ……ど、どうなって……」

「大丈夫です、進んで下さい！」

それでも、アロナは冷静を崩さない。

「……。分かりました。アロナを信じます」

アリスの発破にも助けられ、五人と二人は駅の階段を降りていった。



駅構内にも、やはり人はいなかった。改札を見張る者も当然おらず、そこを素通りする。

照明だけは何故か点灯しており、それがこの場においては逆に不気味だった。

そして、とうとう、ホームまで辿り着いてしまう。

「……列車、本当に来るのかな？」

「はい、そろそろですよ」

モモイの懸念をアロナは一蹴する。

——程無くして、宣言通りに列車が到着した。その車体は長らく放置されていたかのように、全体が錆び付き、苔むしていた。——扉が開かれる。「すう、はあ。……もう、後戻りは出来ないね」

「うう……でも、行くしかない、よね……」

「……う」

モモイの手が、一層強く握られる。

「……ミドリ？」「!!」

ミドリは慌てて手を離れた。

「んもう、ミドリったら」

「——さあ、乗りましょう！ 私達ならきつと上手くいきます！」

そして全員が中へ乗り込むと——それを待って

いたかのように、扉が閉じられた。



まるで廃車のような外観に反して、中は一切の劣化を感じさせなかった。明らかな違和感だが、過ごしやすい環境であることは素直に有り難く、その場の全員が心を休めていた。

「キヴォトスの外って、どうなってるんだろうね？」
モモイが話題を投げる。

「先生の生まれ故郷ってことだね？ うーん……平和だったら良いけど」

「外について何か知っていますか？ アロナ」

ケイが尋ねる。

「私もそこまでは……」

「アロナ先輩も万能ではありません。行つてその目で見るしかない、ということです」

「えー！ 何それー！」

頬を膨らませるモモイに、ミドリとケイが突っ込みを入れる。他愛の無いやり取りだが、それでも張り詰めた糸は多少なりとも弛緩された。

こういふとき、モモイは頼りになる。

「………」

一方アリスは、暗いトンネルの壁と、ガラスに

映る自身の顔を眺めていた。

「……アリスちゃん、不安？」

隣に座っていたユズが、アリスの手に自身のそ

れを重ねる。青灰色の眼差しが、弱々しくもしつ

かりとアリスの瞳を捉えていた。

「……そう、ですね。アリスは、少し怖いです」

それは、普段のアリスからすると、あまり口に出さない類の弱音だった。

「アリスは勇者として、みんなの前を歩かなければなりません。今も、そう努力しています」

膝に置かれたアリスの手に、力が籠る。

「ですが……何だかとても嫌な予感がして……何故かは分かりませんが……アリスは……」

「……………」

ユズの掌は、その機微をしっかりと感じ取っていた。

「……うん、わたしも。……わたしも、怖い」

「……………」

アリスもまた、ユズの手が震えていることに気付く。

「でもね？ ……みんなが、いるから。アリスちゃんがいるから。……だから、わたしも頑張る。アリスちゃんの力に、なりたいたいから」

ユズは少し泣きそうな顔で、笑って見せた。

「ユズ……。ごめんなさい、アリスらしくありませんでしたね」

アリスも、いつもの笑顔を努める。

「はい！ 元気を貰いました！ ありがとうございます！」

「ふふ……良かった」

二人は互いの恐怖心と愛情を確かめるように、おでことおでこをくっつけ合わせた。

——そのとき。目の前が一瞬だけ白く飛び、車内の景色が一変する。

「……………え？」

窓の外は屋外だった。空は紅藤色に染まり、地まで続く鏡の湖面は完全な凼を物語っている。

「……ユズ？ みんな？」

その場には、アリスしかいない。

——否。アリスの真正面の席に、その生徒はいた。垂れ落ちる青みがかった銀髪の奥には、桃色のインナーカラーを覗かせている。ただし、背は恐

らくアリスより高い。

「……アロナ？ アロナですか？」

彼女はアリスの問いには答えず、代わりに継ぎ接ぎの言葉を並べ始めた。

「私——ミ——」

「え？」

「私の選——かれた——況——結局——」

——正し——だなんて」

「き、聞こえませんか！何を言っているのですか!？」

「——しいで——先生」

「先生……？ 今、先生って……」

「きつと——構いません。——おそらく

——選択——」

「あ、あなたは……あなたは誰ですか!？」

アリスは身に降りかかる混乱を押し潰すように叫んだ。



「……！」

途端に、声が鮮明になる。彼女は今度こそ意志をもって、アリスと視線を交わした。

「責任を負う者について、彼と話したことがあります」

「……彼？ ……先、生……？」

「あなたもきつと、遠からず理解できる時が来るはずです。大人としての、責任と義務。そして、

その延長線上にある選択。それが意味する心延えも」

「……………」

「アリス。……私が信じる大人。そして、彼に選ばれたあなたになら。捻れて歪んだ終着点を乗り越えた、あなた達になら。再び……もう一度——」

アリスの視界は、白に包まれた——。

